

「パンデミックの（非）想像力——記憶と記録と文学と、そしてヘミングウェイ」

石塚久郎

「パンデミックの世界と文学のことば」(2021/9/18)

## イントロダクション

- ・ 『疫病短編小説集』（2021年3月）。
- ・ 疫病を扱う作品が少ない。タイムラグがある。
- ・ Elizabeth Outka, *Viral Modernism: The Influenza Pandemic and Interwar Literature* (Columbia UP, 2020)

## 1. パンデミックの記憶と忘却～1918年のインフルエンザ・パンデミックの（非）想像力

### 1) 1918年インフルエンザ・パンデミック。

- ・ 1918－1920年にかけて世界を襲ったインフルエンザの大流行。5千万から1億人とも言われる死者。人類史上一回の流行としては最悪。  
アメリカ：54～55万人　イギリス：22万8千人　日本：35万人
- ・ 死者のおよそ半数は20代30代の若い男女。
- ・ 死者の3分の2は1918年9月から12月始めの第二波の頃に集中。
- ・ その後遺症も。インフルエンザ神経症・精神病。
- ・ これだけのパンデミックにもかかわらず、集団的記憶が形成されなかった。

### 2) 「忘れられたパンデミック」

- アルフレッド・W・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ——忘れられたパンデミック』*Epidemic and Peace, 1918* (1976); *America's Forgotten Pandemic* (1989)同じ内容で再版。
- ・ ようやく今世紀になって集団的記憶・文化的記憶が形成される。
- ・ それまでは歴史の教科書にも載っていない。文学も。
- ・ 集団的記憶と個人的記憶とのギャップ

忘却の理由：

### 1. 戦争の影響

- ・ タイミング：ちょうど戦争末期。疲弊。戦争疲れから死への無関心。
- ・ 戦時中なのでストイックな態度が働いた。特にイギリス。  
“Fear is certainly the mother of infection” (*Times*, 1918/10)
- ・ 戦争での死とインフルエンザによる死の意義の違い。

## 2. インフルエンザそのものの性質

- インフルエンザの流行は特別ではない。
- 二面性＝凡庸性と致死性
  - 1) 単なる風邪や他の気管支系、呼吸器系の病気や熱病の症状と似ている。軽い症状で終わる場合も。致死率も低い。季節性の流行。あまりに平凡で日常的な病。
  - 2) その一方で「黒死病」のような致死率の非常に高くなる流行にも。
- ドラマティックではない。キャラが立たない。⇒恐怖の種として記憶に埋め込まれるような病ではない。
  - ・ 罹患率と死亡率の大きな開き。罹患率は非常に高いのに、死亡率（致死率）は3%を超えない。
  - ・ 目に見える外傷を残さない。戦争負傷者との違い。
  - ・ 特にパンデミックになると顔をもたない、特徴がない。敵として描きにくい。
  - ・ プロットがない。日付をもたない。いつ始まっていつ終わったのかもよく分からない。偏在し凡庸である。
- Outka の議論も。表象しがたい幽霊的存在としてテキストに痕跡を残しては消す、喚起しては消すという作業をする。パンデミックを書き込んだ文学作品が少ない（ほぼないように見える）からといって、全く無視されたのではない。
- 「(非) 想像力」というタームでとらえ直したい。

## 2. ヘミングウェイとインフルエンザ・パンデミック～「一日待つ」(“A Day’s Wait”)を読む。

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899—1961)

### 1) ヘミングウェイとスペイン・インフルエンザ

Susan F. Beegel, “Love in the Time of Influenza: Hemingway and the 1918 Pandemic,” in *War + Ink: New Perspectives on Ernest Hemingway’s Early Life and Writings*, ed. Steve Paul, Gail Sinclair, and Steven Trout (Kent State UP, 2014).

1917年、Kansas City Star の見習い記者。11月：第7ミズーリ歩兵連隊に入隊、カンザス州のキャンプ・ファンストンで訓練。

1918年春、合衆国赤十字に登録、5月フランスへ。6月イタリア着。7月、北イタリアのフォッサルタの前戦で砲弾の破片を浴び、負傷。ミラノの赤十字病院で療養。そこで7歳年上の看護師アグネス・フォン・クロウスキーと出会い、恋に陥る。

10月4日、患者の一人 Mr. Colter がインフルエンザによる肺炎で死去。

From *The Diary of Agnes von Kurowsky* in *Hemingway in Love and War* (Northeastern UP, 1989)

[*Friday, October 4* (1918)]

Mr. Colter was so much worse last night & tonight that Cavie came on with me tonight. We were so in hopes we would pull him through. Dr. Jardine came @ 10.45 & said these cases were liable to go very quickly—& the Lieut. Died at 11.30 almost in my arms. We worked over him like fiends & did everything we could think of but, it was no use. I cried for the first time over losing a patient, but it seemed so dreadful to die off in a strange land with none of his people near & he was so sweet! [85]

[*Saturday, October 5*]

I had a 1/2 night off tonight. I was just about done up this A.M. after that night of sorrow. Cavie stayed with me until 4. We laid him out & I shaved him, & I never saw anyone look so lovely & smiling. [85]

**“At one o’ clock in the morning”** [from Peter Griffin, *Along with You, Hemingway the Early Years*]

“Don’t you love me,” the girl said. “Why didn’t you kiss me then?”

.....

“Kiss me now.”

“I don’t want to now.”

“What’s the matter?”

“Nothing.”

.....

“You don’t love me,” she said. “If you loved me you’d want to kiss.”

“I’m afraid.”

“Of what.”

“Of getting floo.”

.....

“But this is worse because it is so sudden. There isn’t any time to wear the body out and yet, the violence isn’t from outside.” [96]

後に「死者の博物誌」の中に書き込む。唯一のパンデミックの記述。

### **“A Natural History of the Dead”**

The only natural death I’ve ever seen, outside of loss of blood, which isn’t bad, was death from Spanish influenza. In this you drown in mucus, choking and how you know the patient’s dead is: at the end he turns to be a little child again, though with his manly force,

and fills the sheets as full as any diaper with one vast, final, yellow cataract that flows and dribbles on after he's gone. [ *Winner Takes Nothing*, (Arrow Books, 2006), 118]

## 2) 「一日待つ」 “A Day's Wait” (1933) とパンデミック

- 「一日待つ」『勝者には何もやるな』 *Winner Takes Nothing*

**粗筋：**9歳の息子シャツが両親の寝室に入ってくる。息子は具合が悪そうなので（顔は青白く体は震えている）、父親は部屋に戻って寝ているようにと言う。息子は階下へおり着替えをして暖炉のまえでぐったりしている。医者呼び、診察してもらおうと熱が102度あるという。インフルエンザが流行っているようだ。3種の薬をもらい、部屋に戻り息子に本を読んであげるが、息子は上の空。付き添ってくれなくてもいいよと息子に言われ、父親は11時に息子に薬を飲ませると、狩りに出かける。狩りを終え帰宅すると息子の熱は下がっておらず、それを聞いたシャツはかなり深刻な顔をする。実は、華氏と摂氏のとの違いが分かっていない息子は、44度以上あると生きられないと友達から教えられ、自分が死ぬものだと思っていたのだ。父親から華氏と摂氏の違いを説明されると緊張がほどける。

**テーマ：**父と子とのディスコミュニケーション。息子シャツの成長物語。

⇒しかし、もやもや感残る。謎多い。

- Walker Larson, “The fear of death: the real virus in Hemingway’s ‘A Day’s Wait’.” *Hemingway Review* 40 (2020): 81-86.

**ラーソン説：**実は母親はパンデミックで死んでいる。では、冒頭の「私たち」(we)とは誰のことか？「私＝父親と犬」。父親も恐怖(fear)を抱いている。その恐怖が息子にも伝染している。状況もパンデミックの最中かその直後。

**石塚説：**普通のインフルエンザを描くことでパンデミックを隠している・消しているテキストと読む。パンデミックの（非）想像力のテキスト。インフルエンザの二面性と幽霊のレトリックを活用して、存在と不在（喚起と消去）を同時に行っているテキストと解釈。二重構造。図参照。

論拠：

- 1) we と母の幽霊的存在・不在。ラーソンのパンデミックによる母親死亡説を踏襲しつつも、テキストがその存在を喚起しては消すという作業をしていることの方が重要と見る。「いるのにいない」⇒「いないのにいる」という幽霊的存在・不在を生きる母親、幽霊のレトリック。

“A Day’s Wait”

He came into the room to shut the windows while we were still in bed and I saw he looked ill. He was shivering, his face was white, and he walked slowly as though it ached

to move. [(Arrow Books), 110]

- 2) 消された（死んだ）のは母親だけ？they とは誰？母親を入れるとしても少なくとも誰かひとりはいる。家庭内感染の悲劇でもある。William Maxwell, *They Came like Swallows* (1937)。「一日待つて」も同様の悲劇をまったく別の形で表現。

At the house they said the boy had refused to let anyone come into the room.  
'You can't come in,' he said. 'You mustn't get what I have.' [112]

- 3) “This was a light epidemic of flu” 医師の言葉。light ではない great, big, serious な epidemic=pandemic を想起させる。この医者、インフルエンザにやけに詳しい。肺炎さえ起こさなければ大丈夫という言い方もパンデミックを想起。これに関連して、息子シャツの容体は実際どうなのか？華氏 102 度＝摂氏 38.888 (約 39 度)。104 度 (40 度) 以上になったら危険と医師。

Downstairs, the doctor left three different medicines in different coloured capsules with instructions for giving them. …… The germs of influenza can only exist in an acid condition, he explained. He seemed to know all about influenza and said there was nothing to worry about if the fever did not go above one hundred and four degrees. This was a light epidemic of flu and there was no danger if you avoided pneumonia. (110)

- 4) なのに父は狩りに出かける。これも大きな謎。通常は父と子の断絶を意味する。一方、ラーソンは父親が抱える不安や恐怖を解消するための distraction (気晴らし) と読む。父親が動揺しているのが見え隠れする。ウズラ=quail は動詞で「おじける・ひるむ」という意味も。二の反復。

It was a bright, cold day, the ground covered with a sleet that had frozen so that it seemed as if all the bare trees, the bushes, the cut brush and all the grass and the bare ground had been varnished with ice. I took the young Irish setter for a little walk up the road and along a frozen creek, but it was difficult to stand or walk on the glassy surface and the red dog slipped and slithered and I fell twice, hard, once dropping my gun and having it slide over the ice.

We flushed a covey of quail under a high bank with over-hanging brush and I killed two as they went out of sight over the top of the bank. ……and I killed two, missed five, and started back pleased to have found a covey close to the house and happy there were so many left to find on another day. [111-112]

鳥とパンデミックの連想も。

I had a little bird	私のかわいい小鳥
And its name was Enza	その名はエンザ
I opened the window	私が窓を開けた時
And in-flew-Enza.	エンザは飛び込んできた

窓との関連も？冒頭の窓の謎。

父親はサバイバーの罪悪感と共に感染させてしまった罪悪感をもち、かつ、自身がインフルエンザの精神的後遺症に悩まされているのかもしれない。インフルエンザ（精神的・神経症的）後遺症、当時の医学問題。JAMA (1919, Jan 25) “Psychoses Associated with Influenza” by Karl A. Menninger. 信頼できない語り手。

結末の息子シャツの状態。インフルエンザの精神的後遺症も連想させる。

‘Oh,’ he said.

But his gaze at the foot of the bed relaxed slowly. The hold over himself relaxed too, finally, and the next day it was very slack and he cried very easily at little things that were no importance. [113]

- 5) 「死者の博物誌」との関連。『午後の死』（1932）12章からの抜粋。わざわざそれをリサイクルし、「一日待つて」の後ろにおいたのは意図的では？ 「死者の博物誌」における書き換え・加筆も重要。

From *Death in the Afternoon*, ch.12. (A Touch Book, 1996)

The only natural death I’ve ever seen, outside of loss of blood, which isn’t bad, was death from Spanish influenza. In this you drown in mucus, choking and how you know the patient’s dead is: at the end he shits the bed full. [139]

- \* 結論： 氷山理論の二重構造にパンデミックの恐怖を埋め込み、パンデミックの（非）想像力を刻印。母親の死とその幽霊が1918のパンデミックの大量の死（者）を（不在として）表象している。息子シャツの（パンデミックの）死の恐怖も勘違いというレベルに置換されている。なぜこのような構造になったのか、書き方しかなかったのか、しなければならなかったのか？ パンデミックの（非）想像力によって。単に氷山の上だけでも下だけでも表現できない。パンデミックの大量の哀悼されざる死者がいること、忘却されていること、そして、生き残ったものの傷、喪失感を表現するには、「想像力」に富んだテキストではダメ。想像することを奪われたテキスト（非想像力に富んだテキスト）を作り上げるしかない。元々の指示対象であるパンデミックを消すことでしか、その衝撃を伝えられない。

図：氷山理論の援用

